

まえがき

情報社会は、従来のマスメディア中心の社会から、IT社会、そしてユビキタス情報社会へと進展しつつある。情報社会をめぐる議論もまた、主としてこれらの要素を軸としながら展開してきたと言ってよいだろう。加えて、戦前からの長い伝統を持つ図書館・情報サービスの研究も、近年では情報社会論の流れに融合しつつある。

マスメディア研究は今日、メディア倫理やメディアリテラシーの問題として、実践的な観点から行われることが多い。しかしながら、新聞記事という具体的な素材に基づいて新聞社の特性を分析しながら特定の事例を比較検討した研究はそれほど多くない。本論集の冒頭に採録した田中の論文は、この種の先駆的な実証研究であり、今後こうした事例研究の蓄積がますます重要になるだろう。

また、IT社会論に関して言えば、大きく、電子空間論とITを利用する実空間論とに分けて考えられる。松井・河島の共著論文は、音楽をテーマとしたコミュニティサイトにおいて、個人が変更可能な要素（Webパーソナライゼーション機能）を設定した場合、ユーザーの利用特性がどのように変化するかを調査した実証研究であり、主として前者（電子空間論）にあたる。

さらに、本論集のシリーズ的な特徴として、図書館情報学研究者からの投稿が比較的多いため、図書館論が多く採録される傾向がある。今回の号では、日本の児童図書サービスの歴史（新藤）、移動図書館論（中山）、日米の問題利用者論（千）、図書館類縁機関のレファレンスサービス論（田嶋）の4件を採録した。

図書館・情報サービスは、実は、情報社会の最新形態であるユビキタス情報社会論とも密接に結びつく要素を多分に秘めている。なぜなら、「いつでも、どこでも、誰でも情報にアクセスできる環境整備をめざす」というユビキタス情報社会の思想は、まさに図書館界が長年テーマにしてきた事柄だからである。今回の号に採録した論文では、ユビキタス情報社会に向けての提言は明確に行われていないが、将来的には、そうした方向性も視野に入れつつ、新しい情報社会論の創出が試みられることだろう。

なお、編集者の都合により、発刊が大幅に遅れてしまったことを執筆者の方々にお詫びする次第である。

2006年12月1日

竹之内 禎